

明治初期翻訳書『西洋家作雛形』の史的役割

中谷礼仁研究室　丸茂友里

【序】

背景・目的・意義

一何故・何を・如何に訳したか¹

明治初期、西洋文明の導入は建築分野のみならず文化・科学さまざまな側面においておこなわれた。建築分野においては如何にあったのか。明治5(1872)年、佐藤功一²によって「日本に於て最も古く出版せられた建築構造の書物である」³とされた翻訳書『西洋家作雛形』⁴を通して、その一考察を試みる。本書は、原書が1870年ロンドンにて出版された"Cottage Building"⁵であることが明らかにされ⁶、建築分野のみならず、言語学、家政学などの側面からもその資料性に言及がされている。⁷しかし、その史的位置づけと評価については、未だ明確になったとはいえない。

本研究は『西洋家作雛形』とその原書の出版当時における諸背景を明らかにすることを目的とする。そのことにより両書の時局性を再考し、明治初期西洋建築の導入過程における本書の史的役割を考察する。

産業革命後、世界をとりまく背景は大きく変化し、それは現代のわれわれにも、いくつもの課題を投げかけている。

既往研究・本研究の位置づけ

原書の特定に至った菊池重郎は、本書の翻訳者序文に見られる出版目的に対し、原書の選択が「必ずしも適切であったとは云えない」⁸と評している。しかし、これは菊池が両書の時代的な背景を十分に考察した結果ではないと考えられる。また、藤田治彦は同序文より翻訳開始の意図については検討の余地があることを示唆する。⁹長尾重武は、初版後30年余りを経て、異なる出版社から再版されたこと、昭和5年、『明治文化全集』に収録されたことを指摘、今後の課題として「本書がどれほど実用に供せられたか、それがいかなる影響をおよぼしたか、ということであるが、詳細は今後の研究にまつよりは他はない。」¹⁰としている。この他に、翻訳精度の評価は佐藤の「現在の熟語によらずとも之を軽く通読しても意味の通じない箇所は殆どないほど此の翻譯叮嚀親切を極めて居る。」¹¹や、藤田の「まだ正式な建築教育などまったく始まっていない段階で行われた翻訳にしては、かなり適切な訳語が当てられているというべきだろう。」¹²といった評価がある。本研究は、これらの既往研究を踏まえつつ、より広範な史的背景の再考をし、両書の時局性を明らかにする。



図1. 研究対象書物の概要

【1章】『西洋家作雛形』と"COTTAGE BUILDING"

1-1　翻訳本『西洋家作雛形』

■ 翻訳者 村田文夫（1836-1891 芸州藩（現広島県）出身）

本書翻訳に大きく影響があると考えられることには、

①青年期に漢学、蘭学¹³を学んだこと

②幕末英国に出奔¹⁴ し『西洋聞見録』（明 2）¹⁵を記したこと

③明治4年8月、工部省の文書局訳文方に任命¹⁶されたことがあげられる。その他翻訳本には『子供育草』（明 6）¹⁷、『英國律法要訣』¹⁸、『輿地新図』（明 7）¹⁹などがある。

■種々の刊本

奥付より明治5(1872)年玉山堂が初版、その後須原屋から(C)→(D)で出版されたとわかる²⁰。千鐘房に移った時期は明確ではないが、同26年の『東京書籍出版営業者組合書籍總目録』では千鐘房の発行になっている。この目録で「雛形類」ではなく「建築學」に本書が属していることが指摘できる²¹。

表1. 『西洋家作雛形』刊本一覧

	A	B	C	D
表紙	題字	西洋家作ひなかた	西洋家作ひなかた	増補 西洋家作ひなかた
内題	西洋家作ひながた	西洋家作ひながた	増補 西洋家作雛形	増補 西洋家作ひなかた
著者名	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎
発行年	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編
発行所	東京 玉山堂發兌	東京 玉山堂發兌	東京書籍 千鐘房蔵	東京書籍 千鐘房蔵
奥付	日本橋通二丁目 山城屋左兵衛	日本橋通二丁目 山城屋左兵衛	東京書籍 北島千鐘房 須原屋茂兵衛	明治三十七年九月 須原屋 鈴木莊太郎

■序文

東京における火災の要因3つを挙げ、さらに「壬申仲春の災」、すなわち明治5(1872)年2月、和田倉門より出火した銀座の大火のことを記している。これに対する政府の措置などが記されている。そしてある英国人より目下の建設事業の一助となるのみならず、都会から離れた土地での防火対策に繋がる点でこの書物は優れているといわれること、を記し翻訳の経緯としている。既往研究においても、銀座の大火を契機に翻訳されたことは翻訳期間の短さより議論されている点である²²。またこの他にも火災に対する政府の措置の中に「家室ノ制ヲ變革シーニ洋式ニ效フソレ洋人ノ家室ヲ築造スル」²³というのは後の銀座煉瓦街を想定させるが、「救恤ノ典」という言葉に注目したい。

1-2　原書"COTTAGE BUILDING"

■ 出版の推移

2,5,7,10版で改訂されていた。各項目の推移をみると、壁や床などの工法についてはどの版にも共通するが²⁴、1版の"Architecture as a fine art"は2版ではすでに無くなり、"Specification of Works to be done in the Erection of Cottage"という項目が加わっている。5版では新たな改良住宅についての図版とその詳細な説明が加わる²⁵。

■序文

5版改訂につき加えられた序文には、「農業労働者やその妻、そして家族に100ポンドで快適な住居を提供するひとつのモデル」を新たに追加した旨が記されている。

1-3　訳本『西洋家作雛形』と原書"COTTAGE BUILDING"

■末翻訳部分

大きくはCH.ⅠとCHⅢの冒頭が未訳出である。これらはイギリスにおける労働者階級の居住環境の劣悪さについてなど社会的背景を含む内容である。また、部分的には、反復的内容と考えられる箇所、詳細な寸法などが指摘できる。

【2章】原書"COTTAGE BUILDING"(6ed)と翻訳書『西洋家作雛形』（明治5年）の諸背景

2-1　原書"COTTAGE BUILDING"の諸背景

■産業革命と劣悪化した貧民住宅

産業革命後、農地の囲い込みより仕事を失った農民の多くは工場労働者となり、その数は増大した。彼等労働者階級は工場付近に住む場を求めた。そこには十分な居住施設が用意されてはならず労働者の住環境は悲惨な状況であった。²⁶

■貧民層への政府の対応

1834年には、E・チャドウィック²⁷などが中心となって「新救貧法」が策定された。しかしこれは功利主義に基づく支配者階級の偏見的な理論の結果でもあった。²⁸

2-2　原書"COTTAGE BUILDING"の時局性

■造園家ラウドン

当時イギリスの"cottage"に対する概念の変遷と、原書で提案されている"cottage"は図2のように示すことができる²⁹。著者 Allen 思想の背景には有力な造園家であったJ・C・ラウドンの影響が見られる³⁰。ラウドンは貧困層の住宅改善を望んだ造園家でもあった³¹。田舎のコテージに着目し、菜園などを含めたコテージを持つことが出来れば、生活を充足させることができると説いた。このような考え方は、“Cottage Building”にも共通するものである。ラウドンの思想を組み入れた Allen の提唱は、architect という立場から景観としての garden にとどまらず、ハウジング、自給自足という位置付けの生活指標も含まれていることが特徴的である。

■ゴシック・リヴァイヴァルとアーツ・アンド・クラフツ

原書では削られていた1版の"Architecture as a fine art"冒頭には、J. ラスキンの「建築は、常識の根本原理に従わない限りは、衰退し滅亡してしまうだろう。」³²という言葉からはじまる。また、「ピュージンは（中略）尖塔様式は最もイングランドに適していると証明している」と記し、Allen が彼らの思想に大きく影響を受けていることがわかる³³。原書においては度々"picturesque"という言葉も見られる。

■書物としての性格

当時パターン・ブックと呼ばれる建築書が流行していたが、主に中産階級を対象としていた。原書は労働者階級のための住宅改良を目指した書物である。産業革命による材料、技術の革新がある。原書には「実験により」³⁴といった表現がある。コストを下げたより良いコテージの工法を積極的に世に広めるためには、単なる図版で示す"デザイン"要素の強いパターン・ブックものとは性質の異なる、技術書や啓蒙書に近い性格の書物であるといえる。

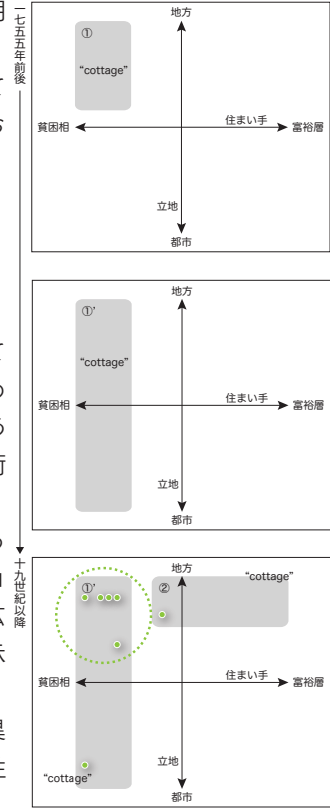


図2. "cottage" の概念変遷と "C.B." 志向

2-3　翻訳書『西洋家作雛形』（明治5年）の諸背景

■銀座の大火

「火事は江戸の華」と言われるほど、明治期以前より火災に困窮していた東京において、明治5(1872)年の銀座の大火が、不燃性建築物という局面を大きく浮上させたのは必然であった。当時工部省工部大丞であった佐野常民³⁵は、工部省御雇い外人の技術者たちに、東京の罹災地の再建を如何にするべきかの意見を求めていた³⁶。実際に市民に対して布告されたT・ウォートルス³⁷の「煉瓦石建築方法」「家屋建築方法」も、そのまま建設されるものとは府当局も考えてはいなかったことが指摘される。³⁸

■罹災者救済

銀座大火は焼失区域が相当な広域にわたった為、罹災者救護が急を要した。木挽町から築地にかけては当時貧困者の集団地区があり、³⁹相当数の貧窮者が発生し大蔵省は⁴⁰火災の救恤を目的に募金を集めた。募金の一部は急速に罹災貧困者に支給された⁴¹。これが序文の「救恤ノ典」と考えられる。

■救貧法成立へ向けて

明治初年、大火以前から罹災者に対する救済法は展開されていた。また災害困窮者の他、幕末期から明治初頭にかけて、商業資本の流通、海外資本主義国の来朝、などにより⁴²農村は荒廃し多くの困窮者が生じていた。同4年の廃藩置県を経て11月4日の太政官布告により、土木等と並んで救恤の一切の決定権を国家の政治体制の元に掌握する旨が記される。政府のみならず、『東京日々新聞』同5年3月8日⁴³に「濟貧恤窮ノ説」と題した論説が掲載されるなど、貧困層の救済に関する意識は社会に広く存在していた⁴⁴。

2-4　翻訳書『西洋家作雛形』（明治5年）の時局性

上記のような背景と1章で指摘した翻訳者村田の役職等より、本書は銀座大火以前から翻訳開始されていた可能性が高い⁴⁵。出版当時の広告には、西洋建築にするという意識より「安全」「健康」に関心があるようにも考えられる⁴⁶。

2-5　翻訳出版によるの時局性の変質

既往研究により原書の選択は「必ずしも適切であったとは云えない」とされていたが、本書の翻訳開始時には、防火とともに貧民層の救済も大きく意図していた可能性が指摘できた。翻訳者村田の『西洋聞見録』⁴⁷にイギリスの家屋が1666年の大火を契機に木造から煉瓦石造に変革された記していることから、原書の意図には直接見られないが煉瓦造の根底には防火意図があることを理解した上での翻訳であった。しかし、本書出版の際に銀座大火を経て、防火、西洋建築移入の面が強調される構成になったことも指摘できる⁴⁸。

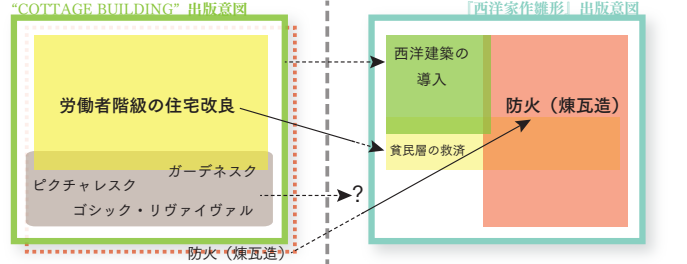


図3. "C.B." と『西洋家作雛形』との出版意図の変質

【3章】『西洋家作雛形』の時局性の変質

3-1 明治期公刊建築書

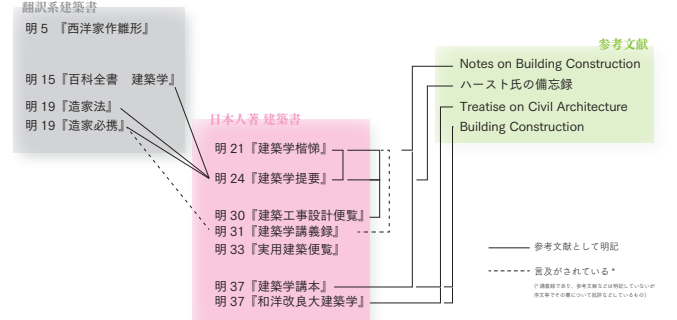


図 4. 明治期公刊建築書の主な関係図

現在確認される明治期公刊建築書の中で、西洋建築に関する記載があるものは、本書のあと 10 年ほど時を経て出版される。以降の建築書では参考書として各書に関係性が見られるが、『西洋家作雛形』だけはその後、書物としての直接的関係、影響はみられない⁴⁹。

3-2 日本の「建築」と住宅

発行(明治)	書名	著者	発行地	発行書
5	建築法	陸軍学兵校	東京	陸軍学兵校
5	西洋家作ひながた	シー・アール・モン・増補 村田文夫・山田貞一郎 訳	東京	玉山堂
15	建築学百科全書	村田文夫・山田貞一郎 訳 文部省 訳	東京	文部省
15	工用学語	宮地高麗 著	東京	金港堂
19	建築法	チャムパー 著 鎌倉重吉 訳	東京	丸善
19	匠工必携	奥田四子吉 著	京都	奥田吉次郎 山内正次郎
19	建築必携	シヤワツツル 訳 松田茂文 監修漢蔵記	東京	加藤良吉
21	新選作事用文	柳待柳太郎 編	東京	古文堂
21-23	建築学楷梯	中村達太郎 編	東京	永倉隆書店
23	欧米建築	下田菊太郎 著	東京	下田菊太郎
24	建築学提要	千歳英吉 著	広島	謙吉堂
25	建築家語彙	佐藤勇吉 著	東京	共益興社
26	小学校建築図案	文部省 文部省	東京	文部省
27	建築法 一巻・五助建築図解	南村善次 著	大阪	南村善吉
27	洋館建築設計書々式	笠川知方 編	東京	関工堂
27	建築家語彙	小松富山 著	東京	南文堂
28	大工職工作文字必要便	黒木栄助 著	東京	栄達堂
28	木造耐震家屋構造要領等調査	文部省震災予防調査会 ノミ 著	東京	文部省震災予 防調査会
30	建築学提要	千歳英吉 編	東京	謙吉書院
30	建築造営心得書	伊藤為吉 著	東京	伊藤建築設計 事務所
30	建築工事設計便覧	大泉竜之助 編	東京	謙吉書院
30	建築設計通書	柳田清一 編	東京	共益興社
32	建築設計便覧・建築工事	滝大吉 著、野村一郎 校訂 大泉竜之助 編	東京	謙吉書院
31-42	建築学講義録	滝大古 述	東京	謙吉書院
42	家屋改良談	土屋元作 著	東京	時事新報社
43	家屋改良便覧	竹真直次 著	東京	博文館
45	建築必携	Harriet John Thomas 著 今井義三郎 訳	東京	謙吉書院
36	通俗家屋改良建築法	井上繁次郎 著	東京	博文館
37-38	建築学講本 第1,2,4冊	建築学研究会 編	東京	建築学研究会
37-44	和洋改良大建築学	三浦四郎 著	東京	大倉書店
38	建築工事仕掛便覧	小国仁一 編	東京	謙吉書院
38-41	和洋建築工事仕掛設計実例	田中豊太郎 編	東京	謙吉書院
39	学校建築通解	島田博 著	新潟	東広堂
39	簡易洋風建築術	森友吉 著	東京	信友堂
39-40	和洋住宅建築学	駒村勲治 著	東京	須原屋

図 5. 明治期公刊建築書と主な建築界

3-3 『西洋家作雛形』の時局性の変化

1 章にて言及したように、本書は 30 年以上を経ても再販されていた。その時局性は本国において「建築家」が誕生したことをはじめ、近代技術によって建築が急速に発展していく中で、変化していったことが考えられる。さらに佐藤功一の頃（昭和 5 年）⁵⁰ には日本において最初の西洋建築に関する書物といった評価が加えられていく。本国の建築書は教科書的なもの、仕様書的なもの、など目的によってより分化していく。

【4章】〈考察〉明治初期翻訳書『西洋家作雛形』の史的役割

4-1 訳せたこと・訳さなかったこと・訳せなかったこと

■六つの立面

原書では「ピクチャレスク」という概念のもと、それを検討するために同じ立面を三件並べる図版が内扉の前に挿入されている。しかし本書においてはその並びが崩され、その立面の比較になっていない図版となっている。すなわち風景として立ち現れる建築の創造の想定、という原書の意図が表現されているとは言えない。この図版が象徴的に示すように、西洋建築における思想的部分は概念不在によって「翻訳」には至らなかったと考えられる⁵¹。

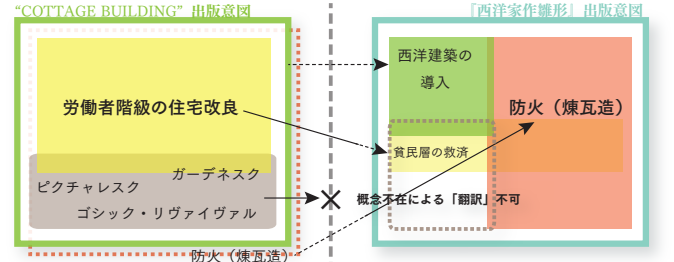


図 8. "C.B."と『西洋家作雛形』の出版意図の再考

■翻訳できたこと翻訳しなかったこと翻訳できなかったこと

出版当時の背景とその後の建築書、ならびに日本における「建築」の成立を統合し、本書の翻訳を再考すると、図 9 のように考えられる。それは、「建築」に含まれる工学・美術といった概念が未分化の明治初期において、そのような姿勢での移入ではなく、原本の出版意図の大枠である労働者階級の住宅改良という側面は捉えたうえで、本国の時局性による強弱をつけながら、いかに西洋建築と導入するかという究極的細分化を経て統合された翻訳書であったといえるのではないか。

4-2 「雛形」の孕むもの

翻訳者にとって本書翻訳の指向は西洋建築〈全体〉を導入することであり、それを達成するために当時としては「かなり適切」に日本語として表わされたことは確かである。しかしみじくも、西洋建築の〈全体〉の根底にある思想の不在によって翻訳者の意図とはずれた「雛形」書として明治 5 年はあったことは考えられる。然れどもそれは今日の我々には「雛形」書ではなく、よりスケールレンジの広い書物として浮かび上がってくるのではないか。

【結】

『西洋家作雛形』の主体についてより精緻に調査し、出版の推移を明らかにした。また翻訳者序文をより精緻に分析し、その諸背景へとつながれた。原本 "Cottage Building" の版の変遷を明らかにした。両書の比較読解によって、未訳出箇所の整理をした。（1 章）両書の出版された諸背景を追い、原書の "cottage" の文脈を整理しその特徴と出版目的を労働者階級の住宅改良のみならず、その根底にある当時の西洋建築思想の中での位置づけを明らかにした。『西洋家作雛形』については、これまで本書周辺では言及されることのなかった、貧民層に対する政府の関心を明らかにした。それによって、本書の翻訳出版目的との齟齬が指摘されていた部分を再考し、よりの確な本書の時局性を示した。（2 章）さらに、『西洋家作雛形』以降の建築書の傾向を整理し、本書は直接的な影響関係には無いことが明らかといえた。しかし、日本に「建築」が、本書の評価と読み手の関心はその時局性の変質とともに推移したと考えられる。（3 章）以上踏まえ、両書の比較を再考し、『西洋家作雛形』が〈翻訳できたこと・翻訳しなかったこと・翻訳できなかったこと〉を考察した。また、近世までの「雛形」書とは一線を画す本書の「雛形」の孕む意味が考えられる。（4 章）

補記

2012 年度より、早稲田大学中谷礼仁研究室の文献ゼミにおいて『西洋家作雛形』とその原本 "Cottage building" に関する研究を行なってきた。本研究はこの文献ゼミを母体とする。

文献目次 『Cottage Building』 ※ C.Bruce Allen "Cottage Building; and Hints For Improved Dwellings For Labouring Classes" (Sixth edition)(Strahan&Co. , 1870) ・ Preface ・ Chapter I. On the Necessity that exists for increased Attention to the Dwellings of the Poor (pp.1-20) ・ Chapter II. Hints on the Construction of Cottages for the Labouring Poor... (pp.21-54) Section I. - Site and Position (pp.21-23) Section II. - Drainage, and Supply of Water (pp.23-30) Section III. - Walls (pp.30-39) Section IV. - Floors (pp.40-44) Section V. - Roofs (pp.45-48) Section Vi. - Ventilation and Warming (pp.48-54) ・ Chapter III. Remarks on a Single-floor Double Cottage (pp.55-59) Plates I. to XXXVI.—Plans, Elevations, Sections, &c. (pp.60-94) Estimate of Cost (p.95) Specification of Works to be done in the erection of Cottages (pp.96-102) ・ Appendix: Plan for a Labour's Cottage, with Illustrations (pp.103-105) Specification (pp.106-108) Economy of Rural Dwellings for Tradesmen and Persons of limited Incomes, with eleven Illustrations (pp.109-124) Descriptive Specification, with References to the letters on the Plan (pp.125-130)	『西洋家作雛形』 ※村田文夫、山田貞一郎訳『西洋家作雛形（全4巻）』（東京,玉山堂,1872） ・西洋家作雛形序（明治五年、村田文夫）（序1-2丁） ・凡例（明治五年、訳者）（序3丁） ・西洋家作雛形目次（目録4-5丁） ・巻之一 第一編 場所并尔位置の事（1-2丁） 第二編 水利并尔給水の事（2-14丁） 第三編 壁塙の事（14-29丁） ・巻之二 第四編 床の事（1-8丁） 第五編 屋根の事（8-13丁） 第六編 風入并尔温風の事（13-23丁） ・巻之三 第八編 家宅の平面、前面断面の圖解（1-22丁） 第九編 建築入費の事（22-23丁） 第十編 建築諸職人の分課（23-34丁） ・巻之四 第十一編 ガルド子礼氏并尔ソン氏の職人ル備へ多る一家の造法（1-2丁） 第十二編 五室の家宅建築尔付諸職人の分課（3-6丁） 第十三編 田舎の家宅尔付き儉約法（6-28丁）
--	--

【註】

序

1 加藤周一「明治初期の翻訳—何故・何を・如何に訳したか—」（加藤周一、丸山真男『日本近代思想体系 15 翻訳の思想』,岩波書店 1991, p.342）

2 佐藤功一（1878-1941）建築家。

3 佐藤功一「西洋家作雛形解題」,吉野作造編『明治文化全集 第24巻、科学編』（日本評論社,1930, pp.7-14）

4 シー・プリュス・アルレン著 村田文夫、山田貞一郎訳『西洋家作雛形』（玉山堂 1872）

5 C.Bruce Allen 著 "Cottage Building"(Sixth edition,Strahan & Co., London,1870）

6 菊池重郎「明治期洋風建築術書『西洋家作ひながた』:1 その著者・訳者・刊本について」,『日本建築学会研究報告 (31-2)』（日本建築学会,1955,pp.233-234）、菊池重郎「明治期洋風建築術書『西洋家作ひながた』:第2報 - その刊行の意図と原書との関係について」,『日本建築学会研究報告 (3132)』（日本建築学会,1955,pp.235-236）

7 藤田治彦「明治 5 年刊『西洋家作雛形』の建築用語」,『特選山論叢 33 号、美学篇』（大阪大学大学院文学研究科 1999,pp.1-24）

8 前掲 菊池 1955 第二報

9 銀座の大火によって翻訳が開始されたと考えると、大火から出版までがわずか 8 ヶ月しかないことをあげている。これに関しては、本論でも十分に検討すべき事項である。

10 長尾重武『西洋家作雛形』『都市住宅』1974 年 5 月

11 前掲 佐藤 1930 p.14

1 章

12 前掲 藤田 1999 p.21

13 緒方洪庵の門下。同じ頃、福沢諭吉なども同門であった。

14 グラバーの幹線により、国禁を犯して 1 年半ほど滞在した。

15『西洋洋見録』、井筒屋勝次郎出版（1869）

16 七等出仕、その後工部省内では測量正（明 7）等を務めた。同 10 年には官を辞して團圓社を設立、ジャーナリストとして成功を収めた。

17『子供育草』,汪影楼（1873）

18『英國律法要訣』（1875）

19『輿地新図』稲田佐兵衛等出版（1894）

20 千歳房蔵版には、発行年記述の有無によって「須原屋茂兵衛」の建築用語、「鈴木荘太郎」の間違いがある。千歳房についてみると、明治 37(1904)年 9 月に須原屋茂兵衛は一度須原屋ののれんを下ろしたが、鈴木荘太郎がそれを譲り受けたという経緯がある。

21 明治 19 年の「玉山堂板元目録」には建築学といった分類はなく、本書も雛形類に属している。

22 前掲 藤田 1999 p.21

23 本書 序—ウラ

24 改訂によって、初版の技術に批評がされていることもある。

25 原書 6 版は 5 版と内容の変更はない。

2 章

26 近代工業都市の誕生と都市問題の発生である。

27 エドウィン・チャドウィック (Sir Edwin Chadwick,1800-1890) イギリスの社会改革者。

28 つまり、この施策は、法律によって労働者階級を管理しようとするもので、職に就かない貧困者を「救済院」に收容するというものであった。救済法では、收容された者には「一般の労働者のいちばん惨めな者よりも不快な生活をさせる」ことが定められており、貧困は社会的な悪であり、救済院での生活はその罰とみなされていた。その結果、本来、この施設に收容されしかなるべき貧民も、それを拒むようになり、成果はほとんど上がらなかった。

29 CH. III の Plates 1. to XXXVI. の 7 種のコテージについてプロットした。

30 原書 p.12「故・ラウンド氏はこの問題についてこう述べている。現在の労働者たちの階級で、彼らが得ることが出来るのは、財産家の雇い主からの慈悲やいたわりによるわずかな手当てだけであった。農業や工場で雇われているイギリスの（ British ）一般的な 労働者に共通する。不幸で不安定な傾向は、もっとも嘆かわしく、彼らの状況を良くするためにあらゆる努力がなされるべきである。地方のすべての雇傭労働者が雇と快適なコテージに居住するようにするために整備する事を、簡単に行なうような手段を私は知らない。親切心があり、利己的でないと言うにふさわしいその 故（ラウンド氏）は、慈悲深く、（前述のような）理解のある願いを口にしていた。」

31 一方で、ラウンドはガーデネスク（gardenesque）という概念を確立した。彼がとりわけ奨励したのは秩序ある多様性であった。また彼はイギリスで最初に都市型公園の開設を主張した人物であった。

32 ジョン・ラスキン著『建築の七燈』（1849）、訳は杉山真紀子参照。この書は"Cottage Building"の初版の直前に出版された本である。

33 壁の工法のセクションにおいて、壁紙の色への言及で、ビュージョの評価などに入れている。

34

35 佐野常民（さの つねたみ 1823-1902）

36 工部省測量司マコビンなど。

37 トーマス・ウォートルス (Thomas James Waters, 1842-1892)

38 煉瓦建築についてどういったものかわかっていなかった当時の市民に対して、ウォートルスの意見を充分にわからせる様に翻訳することが如何に困難であったかについて、この布告を出すまでに東京府の案文が再三訂正されていることによっても推測できる。また、その翻訳布告されたものすら、誤記があることが指摘されている。

39 彼らのなかには、築地周辺にいて外国人居留地の設置によって、やっとの思いで立ち退き移転して住みついていた。

40 大蔵省の渋沢栄一と東京府の井上馨がほぼ同時に太政官に提出している。

41 当時の 13,334 円、一人平均 89 銭ほどが支給された。

42 ささまざまな要因が考えられる。

43 銀座大火の 10 日後であり、また当時『東京日日新聞』自体も発行後間もない時期であった。

44 民間で初期のものとしては福沢諭吉の『西洋事情』などにもその意識が見られる。

45 池上重康「明治初期日本政府蒐集船載建築書の研究」において、原書が大蔵省の蔵書であったことが明らかにされている。しかし、村田は工部省にいたが、大蔵省に翻訳局ができたのは銀座大火後であり、それ以前から翻訳しはじめていた可能性をより強くする。

46「東京日日新聞」の明治 6 年 3 月 4 日から 3 月 7 日まで 4 日間にわたり、広告が出されている。

47 巻之上 二十六丁裏

48 本書目次構成と内容の齟齬が指摘される。これは、本来原書の CH. 1 も訳出予定であったが、全て割ることになった折に発生した間違っているとも指摘できる。

4 章

51 言語としては "picturesque" を「繪がくように」といった訳し方をしていることが指摘できる。